

# フランス技術哲学の現在

——ベルナール・スティグレールの技術哲学の射程<sup>(1)</sup>——

中 村 大 介

本稿はベルナール・スティグレールという **1990** 年代から活躍しているフランスの技術哲学者の議論を紹介することを目的としている。フランスには **20** 世紀に限っても、科学認識論に属するカンギレム、ダゴニエをはじめ、スティグレールにも大きな影響を与えているジルベール・シモンドン、さらには現代メディア技術をリアルタイムというその特徴から批判的に捉えるポール・ヴィリリオなど、技術に関して独創的な議論を展開する何人かの哲学者・思想家が存在している。私たちは勿論彼らの技術についての考えを軽視するわけではないが、以下の三点によりスティグレールの技術哲学を本稿で独立して取り上げる価値があるものと考ええる。第一に彼が現代のデジタル技術まで議論の対象としているということ。第二に初期デリダを理論的なベースとすることで他の哲学者にはない独自の視点が含まれているということ。そして第三に日本ではいまだ彼の仕事がきちんと紹介されたことが無いことである。

まずはこの哲学者について若干の説明をしておこう。ベルナール・スティグレールは **1952** 年に生まれ、国立視聴覚研究所（INA）の所長を経て、現在は IRCAM<sup>(2)</sup> の所長を務めている。さらに〈メディアロジー〉運動の理論的支柱の一人としても活躍するなど、多方面に渡って活動中のスティグレールだが、近著によれば **1978** 年から **83** 年までの間監獄に収容されていた経験もあるという<sup>(3)</sup>。さて彼は **90** 年代に入り、デリダ、サラ・コフマン、フィリップ・ラクー＝ラバルト、ジャン＝リュック・ナンシーが始めた叢書 **La philosophie en effet** から〈技術と時間〉と題された一連の著作を刊行し始めた。〈技術と時

間〉は全 4 巻での完結が予告されており、2003 年 9 月現在 3 巻まで刊行されている。その議論の大枠は、初期デリダの議論を理論的なベースとしつつ、フッサールやハイデッガーの現象学、先史学者アンドレ・ルロワ＝グーランの諸学説、ジルベール・シモンドンの個体化論と技術論などの批判的検討を通して、従来の目的と手段に縛り付けられた技術観を批判して新たな技術観を提示すると共に、現代技術と過去の諸技術との間の様々な差異を問う、というものだ。

本稿では次の順序で彼の議論を取り上げる。まず第 1, 2 節でスティグレールの技術哲学の理論的、原理的な側面を取り上げる。具体的には、第 1 節で先史学者ルロワ＝グーランの学説が持つパラドクスを見、続く第 2 節でスティグレールがそのパラドクス解決のためにデリダの「差延」をいかにして拡張したかを見ることで、彼の基本的な発想がどのようなものかを浮き上がらせようと試みる。また第 2 節の最後ではスティグレールのこうした拡張がデリダの思考・哲学に対していかなる優位を持っているのか、あるいは逆にどんな弱点を持ってしまうのかということも簡単に見ることにする。続く第 3 節は第 1, 2 節の理論的な側面の適用・応用編である。そこではスティグレールが具体的な技術的対象についていかなる考えを持っているかを検討する。とりわけてメディア技術の変化（文字からアナログ・デジタル技術への変化）に関する彼の考えを中心に取り上げることにしよう。そして最後の第 4 節において彼の議論の哲学的な問題点を指摘し、同時に展望も与えてみたい。

## 1. 理論的側面 (1)

### ——ルロワ＝グーランのパラドクスとアポリア——

スティグレールの最大の標的、それはロゴスあるいはエピステーメ／テクネーという西洋哲学に見られる伝統的な対立である。哲学史的には、プラトンにおいて哲学者のロゴスを道具化するソフィストが批判的に取り扱われたことから、「哲学的エピステーメ／ソフィスト的テクネー<sup>(4)</sup>」という前項優位の二項

対立が成立するが、この着想は諸々の変様を被りつつ 20 世紀の哲学、諸学問にも残存しているとされる。例えば、あの『ポスト・モダンの条件』(1979 年)を書いたりオタールの中にさえ、思考・エクリチュールに対しテレグラフィーを対立させるという形で残っているし<sup>(5)</sup>、さらには 90 年代前半までの認知科学の基本的アイディアの中にさえ、紙などの記憶媒体を無視するという形で残っているという<sup>(6)</sup>。そこでここでは、20 世紀の代表的な先史学者であり、スティグレールが〈技術と時間〉第一巻『エピメテウスの過ち』で長いページをかけて検討している、アンドレ・ルロワ=グーランの人類発生の学説を取り上げることにしよう。彼もまた人間と技術の間の強い結びつきを肯定しつつも、やはり先の対立を残存させているのである。そしてスティグレールが示すのは、このエピステーメ／テクネーの対立が実はあるパラドクスの不十分な解決に由来するということであり、またそのパラドクスを真に解決するために、「差延」というデリダが練り上げた概念が技術の領域において考慮されなければならないということである。以下その議論の過程を追って行ってみよう。

アンドレ・ルロワ=グーランは 1964 年と 65 年に『身ぶりと言葉』という二巻からなる本を刊行している<sup>(7)</sup>。そこで論究されているテーマは、脊椎動物の進化、原人・旧人・新人といった人類の進化、さらには人間社会の変遷や来たるべき人間の運命まで多岐に渡っているが、ここで取り上げるのは、彼がアウストララントロプスあるいはジンジャントロプス<sup>(8)</sup>から原人、そして旧人への進化を述べた部分、つまり人類の発生について論じた部分である。まずルロワ=グーランはこの本の第 1 章でこれまで描かれてきた様々な人間像を挙げ、いく中で、ルソーの『人間不平等起源論』に登場する「自然人」のフィクションを批判している<sup>(9)</sup>。すなわち、技術を用いる堕落した人間以前に自然状態に置かれた人間が存在した、というフィクションへの批判であり、換言すればルソーにおけるピュシス／テクネーの対立への批判である。スティグレールもこのルソーのフィクションを検討しているが、スティグレールによればルソーのこの想定はピュシス／テクネーをめぐるアポリアへと導かれることになる。まずこのアポリアがどんなものかを簡単に見てみよう、というのもルロワ

=ゲーランも後で同種のアポリアに導かれることになるからである。

さて、ルソーは「自然人」をあくまでも必要な「フィクション」としているものの、二足歩行といった条件まで「自然人」の想定から排除することができない。しかしこの条件は人間の起源に存在する自然人、という彼の想定と両立しがたい意味を持ってしまう。というのも、起源からして人間が二足歩行をしており、手を動物の足の役割から解放しているということはまた、人間が手で「操作する」ことをとも意味するからだ。そして手が操作するものは道具、用具である。ルソーは技術を用いるようになった人間の状態を墮落と嘆き、技術から解放されている自然人を人間の起源に想定するのだが、この想定から道具や用具といった技術を完全には追い払うことができない。これがルソーのアポリアである<sup>(10)</sup>。

そしてピュシスとテクネーを対立させるルソーに対し、ルロワ=ゲーランが示そうとするのは、「直立状態の骨格・技術・言語・社会の間の本質的結びつき」である。彼は技術を人間の避けがたい特徴と考えるのだ。しかしスティグレールはルロワ=ゲーランの基本的な着想の内にはあるパラドクスがあり、それを無理やり無いものにしようとすることで彼もまた結局はルソーと同種のアポリアに行き着いてしまう、と批判している。そのパラドクスは「外化」のパラドクスと言われ、概ね次のような構造を持っている。ルロワ=ゲーランは石器の登場を人間の登場のしるしと考える。それゆえ「道具・テクネーが人間を発明するのであって、人間が技術を発明するのではない<sup>(11)</sup>」。しかしその一方で彼はまた「人間は道具を発明することで、テクノロジー的に己を『外化』することで己を発明する」と考えている。つまりここでは人間は「内部」、ある内面を備えたものとされ、それが外化されると考えられているのだ。道具によって発明されるはずの人間の「内部」が己を「外化」して道具を発明するというパラドクス、あるいは論点先取がここにある。道具が人間を発明するのか、人間が道具を発明するのか、決めることができないのだ。

ではルロワ=ゲーランはこのパラドクスをどう切り抜けようとするのか？ルロワ=ゲーランがそのために持ち出す考えこそ、「[石器を最初に発明したー引

用者註] ジンジャントロプスの技術は半—動物学的である<sup>(12)</sup>」というものである。つまりジンジャントロプスの技術はごく単純な意識による先取り（出来上がることになるだろう石の形状の先取り）の産物ではあるものの、大半はゴリラやチンパンジーなどとは違った新たな大脳皮質の組織の外化に、つまりその新たな大脳皮質の外界への対応物に過ぎない、と彼は想定するのだ。実際、彼がアウストララントロプスあるいはジンジャントロプス、原人、旧人という進化の過程で追求しようとするのは、「[大脳皮質の] 前野の新たな組織化と、その論理的帰結」としての「技術性とそれが含む社会の形成<sup>(13)</sup>」である。そしてこうしたごく単純な未来のある状態への先取りがあるものの、いまだ大脳皮質の新たな組織化の「外化」として規定されるような段階の意識のことを、彼は「技術的意識」と呼んで、通常私たちが言うところの意識やあるいは「創造的意識」と区別する。さらにこの先取りがより高度化しより複雑な石器を作れるようになった人間として原人が挙げられるが、いまだ原人の段階でも新たな大脳皮質の組織化の対応物としてその石器は考えられている。そして大脳皮質の組織化が完成した段階、もはや私たちに至るまでその組織に大きな変化が見られないような人間が旧人である。旧人において初めて私たちと同等の意識が産まれる。これ以降、技術の製作と新たな大脳皮質の組織化が対応することは無いだろう。旧人は「創造的意識」を手に入れたのだ。

しかし私たちはここであのおなじみの対立を目にしていないだろうか？ここでは、アウストララントロプスやジンジャントロプス、さらには原人が持つような、単純な先取りしかできず大半は大脳皮質の組織に規定された「技術的意識」と、旧人が持つ反省とシンボルを伴う「非技術的意識」とが対立している。つまり結局のところ、「ジンジャントロプスの技術は半—動物学的である」という形での先のパラドクスの解決は、彼をホモ・ファール／ホモ・サピエンスという対立へ、つまりテクネー／エピステーメというおなじみの対立図式へと連れ出してしまうのだ。しかもここには先のルソーと全く同じ、起源にまつわるアポリアが生じてしまう。ルソーの着想がピュシスからのテクネーの発生にまつわる「最初の起源」のアポリアに導かれたのだとしたら、ルロワ＝グ

ーランはテクネーからのエピステーメの発生にまつわる「第二の起源」のアポリアに導かれる。

「ルソーが肉体的なものに付け加えられにやってくると見て取ったもの[つまり技術]は既に現に最初の起源より以前に存在していた。(・・・)ところで『第二の起源』についても正確に全く同じことが言われうる。第二の起源なるものは存在しない、というのも技術的差異化はアウストララントロプスからしてすでに、十全で全体的な、かつ操作的でダイナミックなそうした先取りを想定しているからだ。(・・・)反省を伴う知性は技術的知性に付け加えられるのではない。それは既に技術的知性の背景に存在していたのだ。<sup>(14)</sup>」

ルロワ＝ゲーランがこうしたアポリアに導かれてしまったのは、最初の「外化のパラドクス」をうまく解決することができなかったからである。ではこのパラドクスはどのようにして解決されるのだろうか？

## 2. 理論的側面 (2)

——デリダの「差延」はいかにして拡張されたか——

スティグレールの独創、それはこのパラドクスを解決する説明原理として「差延」を導入するところにある。まず簡単に「差延」について説明しておこう。「差延」とは初期デリダのキータームの一つであり、諸々の二項対立（パロール／エクリチュール、主観／客観など）や、ソシュール記号論におけるシニフィエ、シニフィアンとの差異などを産出する運動とされ、さらにまたシニフィエ＝「概念」の差異的性格を産み出すことから、ある特定の概念の話し手・書き手への十全な自己現前を無限に遅延させるものともされている。そして「差異」と「遅延」双方を産み出す運動を指し示すためにデリダが作り出した造語こそ、「差延 *la différance*」である<sup>(15)</sup>。簡潔に述べるならば、差延とは、

あらゆる諸差異（記号体系内の差異，諸々の二項対立等）を産み出し，その結果概念の自己への現前を無限に遅延させる運動である，とでもなるだろう。特にこの運動が能動／受動あるいは主体／客体といった対立をも産み出すゆえに，人間主体が能動的にある客体へ働きかけるといった類の人間中心主義的な考えをはみ出すものであることを強調しておきたい。ではスティグレールはこの「差延」をどう導入するのだろうか。実際に見てみよう。

「内部から外部への運動を指し示すような外化は存在しない。そうではなくて内部はこの運動によって発明されるのだ。それゆえ内部はこの運動に先行しえない。内部と外部はそれらを相互に発明する運動において結果的に構成される。それらがお互いの内に発明されるこの運動は，あたかも人間と呼ばれるもののテクノロジー的な産婆術があるかのようなのである。<sup>(16)</sup>」

「差延とは人でも技術でもなく，むしろそれらの共可能性であり，それら相互の到来の運動である（・・・）。差延とは人と技術の手前にそして彼岸にあり，それらを共に定立し，対立という幻影を構成するものである。<sup>(17)</sup>」

人／技術という対立を産み出す運動，この能動／受動といった人間中心主義的な枠組みを越え出る運動をスティグレールはデリダに倣って「差延」と名付ける。スティグレールは，一般に初期デリダにならって記号や言語の問題として導入されることの多い「差延」を，『グラマトロジーについて』第1部第3章<sup>(18)</sup>を受ける形で人／技術の配置の問題へと拡張したのである<sup>(19)</sup>。そして「差延」の運動は彼によればまた「発明」でもある。スティグレールにおいては，ルソーやルロワ＝グーランが考えるような「起源」の問題は結局のところアポリアに行き着くことから，こうしたタイプの「起源」をめぐる問いは一般に擬似問題として退けられる（「あらゆるものの起源は存在しない<sup>(20)</sup>」）。その代わりに彼が重視するのが「発明」である。人がある新たな技術を発明するだけでなく，その技術によって新たな人もまた発明される。発明とは，人／技

術の新たなカップリング、両者の新たな配置の発明なのであり、この絶えざる連鎖と配置の変様こそ考えられねばならないのである。

しかしこうしたスティグレールの「差延」を核とする技術哲学はデリダの思想・哲学に比べて利点を持っている反面、また論理的に一步後退している。二人の「差延」についての考え方の違いを通して、このことを確認しておこう。

まず一方のデリダにとって「差延」は原理ではない。彼によれば「差延」を原理と考え、そこから何らかの帰結が導き出されると考えてしまつては、結局のところ原因／結果という対立の枠組みの範囲内で「差延」を捉えていることになる。デリダの「差延」は正にこうした対立図式そのものを産み出すような、極めてラディカルな運動であつたはずである。他方のスティグレールにとって「差延」は一種の原理であり、その運動により人／技術というカップリングの変様が生じていくことになる。だが「差延」をこのように原理として立てることは、デリダが考えていたその運動のラディカルさを弱めることに他ならないのではないか。この点でスティグレールはデリダから一步後退していると言わざるを得ないだろう。しかしスティグレールの差延にはデリダのそれにはない利点もある。それは、デリダの「差延」がそのラディカルさゆえに具体性を著しく欠いたものであるのに対し、スティグレールの「差延」は人／技術というカップリングの変様という具体的な場面に適用されている、という点である。これは具体的にそのカップリングがどう変化して来たのかを語ることができるといふ点でデリダより優れていると言える。簡単に言えばデリダの「差延」のラディカルさを弱めてしまった分、スティグレールの「差延」は具体性を獲得することができた、ということになるだろうか。

さて続く第3節ではスティグレールの記述する人／技術のカップリングの具体的な変様を簡単にではあるが見てみることにしよう。



### 3. 文字からアナログ・デジタル技術へ

ここでは特にメディア技術の変様に眼を向けることにする。具体的には文字からテレビ、ラジオ、パソコンといったアナログ・デジタル技術への変様を考えよう。さてまず文字の場合に注目されるのは次の二つの性格である。①ある出来事が起こり、それが発信者の手によって書き込まれ、流通し、受信者によって読まれるまでにはあるタイムラグが生じる。②しかも受信者は発信者と同じ読解とエクリチュールの能力を用いることができるのでなければならない。この2つの性格はアナログ・デジタル技術に至り、どのように変様するだろうか。まず①のタイムラグがリアルタイムに置き換わる。例えばアポロの月面着陸という出来事は、その発生からカメラによる受像を経てブラウン管に映し出されるまでに、(光や音が空間を伝播するのにかかる時間を除けば)タイムラグは存在しない。このリアルタイムの専制は現代メディアの大きな特徴となっている。と同時に、②の受信者と発信者の役割も変様を遂げる。もはや情報を発信したり受信したりするのは人間ではない。機械がそれを行うのである。生放送の場合は勿論、例えば録画したビデオテープを再生する場合を考えても、テープに信号を入力するのはビデオカメラであるし、その信号を読み取ってテレビに送るのはビデオデッキである。無論私たちは映し出された文字を読んだりすることに変わりはないわけであるが、ある出来事の発生とその発信、受信に関してはもはや私たちは本や新聞がメディアの中心だった時代と全く同じ能力を使っているわけではないのである。そして見方を変えれば文字を読む者はその人自身一つの「装置」とであることもできる<sup>(21)</sup>。文字を読む者は「装置を備えて」おり、その装置を「外化」することで新たな技術が登場する。

このようにスティグレールはルロワ=グーランにならって、第1節でも取り上げた「外化」の漸進的發展に人／技術のカップリングが移り変わっていく様を見出す。その外化は基本的には「器官」の外化である。この外化のプロセス

は石器という手の機能の外化に始まり、動物の飼育、水力や風力といった自然エネルギーの支配、動力機関といった一連の筋肉の外化を経て、エレクトロニクスによる中枢神経系の外化にまで至る。特に「大脳皮質の機能、神経系機能<sup>(22)</sup>」の外化はそれ独自のプロセスを持っており、文字とりわけて正書法的エクリチュールの発明、図書館整理のための書誌カードの発明、そしてエレクトロニクスの発明といった一連の発明によって形成される。さらにスティグレルによれば、現在ではイマジネーションの外化まで生じているという（例えば映画）。そして彼はまたこうした外化をルロワ＝グーラン同様、単なる器官の外化としてだけでなく「記憶」の外化としても捉える。記憶は知性の一特質ではない。それは「拡大された意味で」理解されねばならないのであり、「一連の作用がその内に書き込まれる媒体／支持体」に他ならないのである<sup>(23)</sup>。具体的には動物の種の行動を規定する種的記憶、人間社会を規定する社会－民族的記憶、個体を持つ個的記憶、そしてエレクトロニクスなどの機械を持つプログラム化された記憶、の計四種類の記憶が考えられている。このように大きなスケールで考えられた「記憶」というテーマは、著作のタイトルに含まれている「技術」「時間」と並ぶ、スティグレルの三番目の大きな問題圏を構成していると言うことができるだろう。

#### 4. 問題点と展望

最後にスティグレルの哲学に含まれる問題点と展望を見て論を閉じることにしよう。最大の問題点は彼のフッサールとハイデッガーに対する取り扱いにあるだろう。実際彼は〈技術と時間〉第一巻『エピメテウスの過ち』の最終章でハイデッガーの『存在と時間』を、同第二巻『方向喪失』の最終章でフッサールの時間論をかなり綿密に検討している。その大まかな議論は次の通り。フッサールは時間論において過去把持（第一次想起）／再想起（第二次想起）／像意識（スティグレルはこれを第三次想起と呼ぶ）の峻別をし、最後の像意識を軽視するような態度を取ってしまったが（但し『幾何学の起源』においては

この限りではない)、この像意識を「既に現にという性格 *le déjà-là*」という言葉で再評価した哲学者こそ『存在と時間』のハイデッガーである。「既に現にという性格」とは「現存在の常に既に先行した過去であり、またそこから出発して彼がこの『人』であり、これこれの息子、娘であるところのもの<sup>(24)</sup>」である。ハイデッガーはこのようにして自分は体験していないが、にもかかわらずそれを相続することでのみ己の過去を構成できるような過去のレベルを取り上げ直したのだが、しかし彼もまた技術によって構成されるこうした過去を最終的には忌避し、本来的時間性を持ち出してしまった……。こうした図式化されたスティグレールのフッサール、ハイデッガー理解は現象学の観点からより細やかに検討されねばならないだろう。

さて、次に展望だが、まず彼の考えが権力論と結びつく可能性があることを指摘しておこう。当然のことだが、スティグレールは技術の発展を無条件に礼賛するような現状肯定のオプティミストではない。特に彼が技術の発明と権力の発生との結びつきを指摘していることは強調しておかねばならない。例えばエクリチュールは「言語（書かれた言語はもはやそれまでと同じ言語ではない）の諸条件、知（書かれた知は必然的に累積するようになる）の諸条件、権力（社会は書かれることで政治に目覚める）の諸条件<sup>(25)</sup>」を産み出すのだと彼は主張している。エクリチュールや技術を知や権力の下部構造とみなすようなこうした視点は、フーコーの言説論には技術や制度、あるいはそれらが持つ伝達作用についての考察が抜け落ちていると指摘した〈メディアロジー〉の指導者、レジス・ドブレの批判と共通するものがある<sup>(26)</sup>。人間と技術の配置を問題にするスティグレールの技術論と、人間主体を知の対象として構成する権力関係に注目するフーコーの権力論とを比較検討するのも、興味深い作業となるだろう。

そして最後に、彼の技術哲学が伝統的な哲学の問題に密接に関わっているということを指摘しておきたい。それは「個体化」という問題である。本稿では取り扱わなかったが、最初に記したように彼の哲学の大きな参照項の一つとしてジルベール・シモンダンの個体化論と技術論が挙げられる。特に前者は随所

で取り上げられ、シモンドンの「転導的 **transductive**」関係が差延の運動とほぼ同義であることが繰り返し確認されている<sup>(27)</sup>。原子論者に代表される実体論的個体化論とアリストテレス以来の質料形相主義的個体化論を批判し、「個体から出発して個体化を考えるのではなく、むしろ個体化を通して個体を考える<sup>(28)</sup>」ことを提唱するシモンドンの個体化論は近年再評価が始まっているし、私たちはスティグレールの哲学を個体化論の流れに位置付けることで、彼の一見新しい発想を伝統的な哲学の内でも考えることも可能となるだろう。

技術、現象学、権力そして個体化。スティグレールの哲学はこれらのテーマの内でも批判を受けつつも発展していく可能性を秘めているものと思われる。

#### 注

- (1) ベルナル・スティグレール **Bernard Stiegler** の著作の引用は以下の略号で示す。

**TT 1**: *La Technique et le Temps -1. La faute d'Epiméthée*, Galilée/Cité des Sciences et de l'Industrie, 1994.

**TT 2**: *La Technique et le Temps -2. La désorientation*, Galilée, 1996.

- (2) **Institut de Recherche et Coordination Acoustique/Musique** の略。直訳すれば「音響・音楽の研究と調整のための研究所」とでもなろうか。なお **IRCAM** は公共情報図書館、国立近代美術館などと共にパリのポンピドゥー・センター内にある。
- (3) **Bernard Stiegler**, *Passer à l'acte*, Galilée, 2003.
- (4) **TT 1**, p. 15.
- (5) **TT 2**, p. 167.
- (6) **TT 2**, p. 187-205.
- (7) 邦訳では一冊にまとめられている。アンドレ・ルロワ=グーラン『身ぶりと言葉』（荒木亨訳）、新潮社、1973年。
- (8) 日本ではこれら二つの名前よりアウストラロピテクスという名称のほうが馴染み深いかもしれない。ただ、アウストラロピテクスやジンジャントロプスなどはアウストラロピテキナエ（南猿亜科）の名の下に分類されてしまうため、「人間」という含意を持つアウストララントロプス（南方で発見されたヒト）という名称を使う方をルロワ=グーランは好んでいる（ルロワ=グーラン、前掲書、72頁）。
- (9) ルロワ=グーラン、前掲書、24頁。
- (10) この段落、**TT 1**, p. 124.

- (11) TT 1, p. 152.
- (12) *ibid.*
- (13) TT 1, p. 154.
- (14) TT 1, p. 171 f.
- (15) 「差延」についてデリダは随所で触れているが、まとめて論じた箇所として文字通り「差延」と題された講演論文 (Jacques Derrida, “La Différance” in *Marges-de la philosophie*, Minuit, 1972, pp. 1–29. 高橋允昭訳「ラ・ディフェランス」『理想』1984年11月号, 67–101頁) と、『ポジション』所収のアンリ・ロンスとの対談 (*Positions*, Minuit, 1972, pp. 9–24. 高橋允昭訳『ポジション』, 青土社, 1981年, 7–25頁) を挙げておく。また「差延」概念を整理したものとしては, Rodolphe Gasché, *The Tain of the Mirror–Derrida and the Philosophy of Reflection*, Harvard, 1986, pp. 194–205 が良い。
- (16) TT 1, p. 152.
- (17) TT 1, p. 151 f. なおここで「人」と訳した **qui**, 「技術」と訳した **quoi** はフランス語ではそれぞれ「誰?」「何?」に当たる疑問詞である。ステイグレルはこうした差延の運動を問題にすると、例えば「人間 l'humain」や「道具 l'outil」「技術の対象 l'objet technique」といった語を用いない。それはこれらの語を用いる時、「人間という主体が道具・技術の対象に作用を及ぼす」といったような主観／客観の含意がどうしても拭いきれないからであろう（ここで問題となっているのはこの主観／客観といった枠組み自体を産み出す働きなのだ）。それゆえこの **qui** と **quoi** をそれぞれ「人」、「技術」と訳すのはやや問題があるのだが、ここでは理解を優先させた。なお、**qui** と **quoi** は〈技術と時間〉第二巻『方向喪失』で次のように定義されている。「私が **quoi** と呼んだもの」は「常に既に技術的な世界内部存在者」(TT 2, p. 13) であり、また「先取りし、望み、可能とし、考え、認識する者が、私が **qui** と呼んだものである」(TT 2, p. 14)。
- (18) 「実証科学としてのグラマトロジーについて」と題されたこの章には、哲学的な論証だけでなく、通常の「学問」の枠をはみ出る「グラマトロジー（文字学）」の可能性を示そうとするやや予言的な雰囲気も漂っており、初期デリダの中では論究されることの少ない部分であった。なお、この章の第2節「学問と、人間という名称」でデリダはルロワ＝グーランに依拠して論を展開しており (J. Derrida, *De la grammatologie*, Minuit, 1967, pp. 121–131. 足立和浩訳『根源の彼方に—グラマトロジーについて—』上, 現代思潮社, 1976年, 171–183頁), ステイグレルはそこから多くのインパクトを受けていると思われる。
- (19) なお本稿では取り扱わなかったが、技術の発明は新たな時間性の発明でもある。それゆえ真に問題となるのは人／技術／時間性の配置の問題である。
- (20) TT 1, p. 182.

- (21) TT 2, p. 153.
- (22) TT 2, p. 97.
- (23) TT 2, p. 88 f における『身ぶりと言葉』の引用。ルロワ=ゲーラン, 前掲書, 396 頁, 訳文一部変更。
- (24) TT 1, p. 214.
- (25) TT 2, p. 132.
- (26) レジス・ドブレ『一般メディアオロジー講義』(嶋崎正樹訳), NTT 出版, 2001 年 (原著は 1991 年), 55–58 頁。もっとも, 権力として国家の検閲を取り上げ, また個人を共和国の法に従属させることでのみ個人への自由の扉が開かれるとするドブレの考えは, フーコーの生権力論に比べていささか素朴かつ保守的なものと思われるのだが (cf. ドブレ, 前掲書, 425–462 頁)。なお, フーコーの言説論に含まれるメディア論的契機に関しては石田英敬の次の二つの論文を参照。「フーコー, もうひとつのディスкурール論」 in 山中圭一・石田英敬編『言語態の問い』, 東京大学出版会, 2001 年, 311–342 頁, 及び「メディア分析とディスкурール論——フーコー「言表ーモノ」理論をめぐる」 in 石田英敬・小森陽一編『社会の言語態』, 東京大学出版会, 2002 年, 283–317 頁。
- (27) 例えば, TT 1, p. 162, TT 2, p. 10. など。また本稿では取り上げなかったがステイグレルは〈技術と時間〉第 3 巻で, シモンドン个体化論をやや詳しく論じている (*La Technique et le Temps*–3. *Le temps du cinema et la question du mal-être*, Galilée, 2001, pp. 147–152.)。
- (28) Gilbert Simondon, *L'individu et sa genèse physico-biologique*, Jérôme Millon, 1995, p. 22.